広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝楽府訳注（二十八）：何遜楽府詩四首＋二首
Author(s)	小川，恒男
Citation	中國中世文學研究，76：73 - 103
Issue Date	2023-03-28
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054529
Right	
Relation	

六朝楽府訳注（二十八）―何遜楽府詩四首十二首―

小川恒男

はしがき

実のところもう何年目になるのかよく分からなくなっているのだが、これまでずっと『楽府詩集』を底本として六朝楽府をその順番通りに読み進めて来た。本稿ではこれまでの流れを変え、何遜の楽府詩四首、

「銅雀妓」
「昭君怨」
「門有車馬客」
「擬軽薄篇」

それに

「苦熱」詩
「擬青青河畔草転韻体為人作其人識節工歌」

の二首を加えて訳注を作成することにした。これらの作も後の訳注に示した通り『楽府詩集』に収められているからである。いずれにしても自分自身の時間が残り少なくなってきたという、凡そ学問とは関係のないまことにもって個人的な事情から流れを変えた。

底本は『何遜集校注（修訂本）』（李伯斉校注　中華書局　二〇一〇。以下『校注』とした。『校注』は張溥本（『漢魏六朝百三家集』本）を底本としつつ、作品の配列を編年に改め、各作品には【題解】と【校注】を附す。

【題解】は繫年の根拠を示し、作品の要旨をまとめて便利なので、これを日本語に訳した。但し、『校注』が用いる『古詩紀』は、逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局　一九八三）と同じく、馮惟訥の原刻本のようだが、本訳注では簡便のために『四庫全書』本を用いた。また、『校注』は、

明・張紘『何水部集』（『四庫全書』本）
明・薛応旂『何水部集』（『六朝詩集』本）
明・張燮『何記室集』（『漢魏六朝七十二家集』本）
明・洪瞻祖『陰何詩集』
清・江昉『何水部集』

などを用いて校勘を行っている。

なお、何遜の楽府作品には佐伯雅宣氏による訳注「何遜詩訳注（1）」（『中国古典文学研究』第十三号　二〇一六）が既にある。参考にさせて頂いたので、この場を借りてお礼を申し上げたい。

「銅雀妓」

【本文及び書き下し】

1 秋風木葉落　　秋風　木葉　落ち
2 蕭瑟管絃清　　蕭瑟として　管絃　清し
3 望陵歌対酒　　陵を望みて「対酒」を歌ひ
4 向帳舞空城　　帳に向かひて　空城に舞ふ
5 寂寂檐宇曠　　寂寂として　檐宇　曠く
6 飄飄帷幔軽　　飄飄として　帷幔　軽し
7 曲終相顧起　　曲　終はりて　相ひ顧みて起てば
8 日暮松柏声　　日暮　松柏の声あるのみ

【日本語訳】

1 秋風が吹いて木々の葉が散り落ち
2 もの寂しくも管絃の演奏する音楽が清らかに響く
3 陵墓を遠く眺めながら「対酒」を歌い
4 寝台を囲むカーテンを眼の前に人の気配のない銅雀台で舞い踊る
5 軒下の部屋はひっそりとしてがらんと広く
6 吹き寄せる風にカーテンがひらひらとひるがえる
7 音楽が終わってお互いに顔を見合わせながら起ち上がると
8 はや日が沈む頃おい、陵墓の松柏に吹き付ける風の音だけが残った

【校勘】

○『芸文類聚』巻三十四。『楽府詩集』巻三十一。『文苑英華』巻二百四。『古詩紀』巻九十三。
0 「銅雀妓」、『類聚』作「銅爵台妓詩」。
2 「管絃」、『類聚』作「絃管」。
3 「歌」、『校注』誤作「空」。今拠張溥本而改。
5 「檐」、張紘本・薛本均作「簾」、『英華』作「庭」、注云「一作『檐』」。
7 「終」、張紘本・薛本均作「中」

【押韻】

「清」「城」「軽」「声」、下平十四清韻。

【題解】この詩は『芸文類聚』巻三十四・『楽府詩集』巻三十一・『文苑英華』巻二百四・『古詩紀』巻九十三に見える。「銅雀」は銅雀台、建安十五年（二一〇）冬、曹操が鄴城（今の河北省臨漳県）に建てた。『三国志』魏書・曹爽伝に拠ると、曹爽は曹操の死後、「詐作詔書、発才人五十七人送鄴台、使先帝倢伃教習為伎（詐りて詔書を作り、才人五十七人を発して鄴台に送り、先帝の倢伃をして教習して伎と為さしむ）」と。また、『文

選』巻二十三の謝玄暉（朓）「同謝諮議銅雀台詩」の李善注が引く『魏志』に「魏武遺令曰、『吾伎人皆著銅爵台、於台上施六尺牀・繐帳。朝晡、上脯糒之属。月朝十五日、輒向帳作伎。汝等時時登銅爵台、望吾西陵墓田』。（魏武の遺令に曰く、『吾が伎人　皆な銅爵台に著き、台上に於いて六尺の牀・繐帳を施せ。朝晡に、脯糒の属を　上れ。月朝と十五日とには、輒ち帳に向かひて伎を作せ。汝等　時時に銅爵台に登り、吾が西陵の墓田を望め』と。）」とある。「銅雀妓」は、楽府題、郭茂倩『楽府詩集』では「相和歌・平調曲」に収める。何遜と同時期の劉孝綽や、少し早い江淹らも、この詩題によって詩を作ったことがあり、後にそのまま受け継がれて楽府題となった。

姚範〔一七〇二～一七七一〕『援鶉堂筆記』・王文濡〔一八六七～一九三五〕『歴代詩評注読本』はいずれもこの詩が謝朓たちと斉の竟陵王蕭子良の往時を偲んでの作だとするが、何遜と竟陵王とに直接交流があったことを証明する資料はない。

【語釈】

0 銅雀妓

［銅雀妓］「銅雀台」とも。六朝詩では【題解】にもある通り『楽府詩集』巻三十一に「銅雀台」の題で陳・張正見、荀仲挙の作を収め、「銅雀妓」の題で斉・謝朓、梁・何遜、劉孝綽、江淹の作を収める。

1 秋風木葉落　2 蕭瑟管絃清

［秋風］秋の風。『楚辞』九歌・湘夫人に「嫋嫋兮秋風、洞庭波兮木葉下（嫋嫋たる秋風、洞庭　波たちて　木葉　下る）」、漢武帝「秋風辞」（『文選』巻四十五）に「秋風起兮白雲飛、草木黄落兮雁南帰（秋風　起こりて　白雲　飛び、草木　黄落して　雁　南に帰る）」と見える。

［木葉］樹木の葉。魏文帝曹丕「燕歌行」二首其一（『文選』巻二十七）に「秋風蕭瑟天気涼、草木揺落露為霜（秋風　蕭瑟として　天気　涼しく、草木　揺落して　露　霜と為る）」とあり、李善注は『楚辞』九弁に「悲哉秋之為気也、蕭瑟兮草木揺落而変衰（悲しいかな　秋の気為るや、蕭瑟として　草木　揺落して変衰す）」とあるのを引く。同じく曹丕「寡婦」詩には「霜露紛兮交下、木葉落兮淒淒（霜露　紛として交ごも下り、木葉　落ちて淒淒たり）」とある。何遜「擬青青河畔草転韻体為人作其人識節工歌」に「絃絶猶依軫、葉落纔下枝（絃　絶ゆるも　猶ほ軫に依り、葉　落つるも　纔かに枝より下るのみ）」との用例がある。

［蕭瑟］ものさびしいさま。双声。右に引いた『楚辞』九弁、曹丕「燕歌行」にも見える。

［管絃］管楽器と弦楽器。またそれらで演奏される音楽。王粲「公讌」詩（『文選』巻二十）に「管絃発徽音、曲度清且悲（管絃　徽音を発し、曲度　清くして且つ悲し）」と。何遜には「詠舞」詩（『玉台』巻五作「詠舞妓」。）に「管清羅薦合、絃驚雪袖遅（管　清くして　羅薦　合し、絃　驚きて　雪袖　遅し）」との用例がある。

3 望陵歌対酒　4 向帳舞空城

［望陵］曹操の陵墓を銅雀台から眺める。劉孝綽「銅雀妓」に「誰言留客袂、遂掩望陵悲（誰か言はん　客を留むるの袂の、遂に陵を望むの悲しみを掩はんと）」とある。「陵」は「西陵」、曹操の陵墓。【題解】に引いてある曹操の遺令に「望吾西陵墓田。」と見え、謝朓「同謝諮議銅雀台」詩（『文選』巻二十三）に「鬱鬱西陵樹、詎聞歌吹声（鬱鬱たり　西陵の樹、詎ぞ歌吹の声を聞かん）」と。

［対酒］曹操が作った「短歌行」（『文選』巻二十七）を指す。「対酒当歌、人生幾何（酒に対しては当に歌ふべし、人生　幾何ぞ）」との冒頭による。曹操には「対酒」（『宋書』楽志、『楽府詩集』巻二十七）という楽府もあるが、こちらは天下太平を歌うばかりで、この詩にはあまり相応しくないように思われる。また、第4句との対応からすると「酒を眼の前にする」の意を含むと考えてよいと思う。

［向帳］とばりに向かって。曹操の遺令に「月朝十五日、輒向帳作伎。」とあった。「月朝」は月の初め。

［空城］人の気配のない城楼。ここは曹操死後の銅雀台。語は宋・顔延之「還至梁城作」詩（『文選』巻二十七）に「故国多喬木、空城凝寒雲（故国に喬木多く、空城に寒雲凝る）」と見える。

5 寂寂檐宇曠　6 飄飄帷幔軽

［寂寂］ひっそりと静かなさま。漢・秦嘉「贈婦」詩（『玉台』巻九）に「寂寂独居、寥寥空室（寂寂として独り居る、寥寥たる空室）」とあり、晋・左思「詠史」詩八首（『文選』巻二十一）其四に「寂寂楊子宅、門無卿相輿（寂寂たり　楊子の宅、門に卿相の輿無し）」とあり、李善注は『説文解字』七篇下・宀部に「宋、無人声。（宋、人声無きなり。）」（「宋」、李善注作「寂寂」。）とあるのを引く。「宋」は「寂」の古字。何遜には「落日前墟望贈范広州雲」詩に「遥遥長路遠、寂寂行人疎（遥遥として　長路　遠く、寂寂として　行人　疎なり）」、「秋夕仰贈従兄寘南」詩に「寸心懐是夜、寂寂漏方賒（寸心　是の夜を懐ひ、寂寂として　漏　方に賒し）」、「還渡五洲」詩に「沙汀暮寂寂、蘆岸晩脩脩（沙汀　暮れに寂寂とし、蘆岸　晩に脩脩たり）」との用例があり、いずれも夕景とともに用いられる。

［檐宇］ひさし。北斉・邢邵「冬日傷志篇」に「終風激簷宇、余雪満条枚（終風　簷宇に激し、余雪　条枚に満つ）」と見える。「簷」は「檐」の別体。

［飄飄］風が吹いてひるがえる様。秦嘉「贈婦」詩に「飄飄帷帳、熒熒華燭（飄飄たる帷帳、熒熒たる華燭）」

とある。

［帷幔］とばり。曹操の遺令に「於台上施六尺牀・繐帳。」と見えた。「繐帳」は目の粗い麻布のとばり。漢・杜篤「祓禊賦」（『類聚』巻四）に「用事伊雒、帷幔玄黄。（事を伊雒に用ひ、帷幔　玄黄たり。）」と見え、梁簡文帝蕭綱「和湘東王名士悦傾城」詩（『玉台』巻七）「垂糸繞帷幔、落日度房櫳（垂糸　帷幔を繞り、落日　房櫳を度る）」とある。

7曲終相顧起　8日暮松柏声

［曲終］楽曲の演奏が終わる。ここは第2句「管絃」を承ける。馬融「長笛賦」（『文選』巻十八）に「曲終関尽、余絃更興。（曲　終はり　関　尽き、余絃　更に興る。）」とあり、梁・劉苞「九日侍宴楽遊苑正陽堂」詩に「曲終高宴罷、景落樹陰移（曲　終はりて　高宴罷み、景　落ちて　樹陰　移る）」とある。

［相顧］互いに顔を見合わせる。宋・鮑照「従臨海王上荊初発新渚」詩に「撫襟同太息、相顧俱涕零（襟を撫して同に太息し、相ひ顧みれば　俱に　涕　零つ）」と。何遜には「仰贈従兄興寧寘南」詩に「相顧無羽翮、何由総奮飛（相ひ顧みれば羽翮無く、何に由りてか総べて奮飛せん）」との用例がある。

［日暮］日が沈む頃。王粲「従軍」詩五首（『文選』巻二十七）其一に「尽日処大朝、日暮薄言帰（尽日　大朝に処り、日　暮れて　薄か言に帰る）」とある。何遜には「見征人分別」詩に「淒淒日暮時、親賓俱竚立（淒淒たり　日暮の時、親賓　俱に佇立す）」、「日夕出富陽浦口和朗公」詩に「客心愁日暮、徙倚空望帰（客心　日の暮るるを愁ひ、徙倚として空しく帰るを望む）」、「春夕早泊和劉諮議落日望水」詩に「日暮江風静、中川聞棹謳（日　暮れて　江風　静かに、中川に棹謳を聞く）」、「詠舞」詩に「日暮留嘉客、相看愛此時（日暮　嘉客を留め、相ひ看て此の時を愛す）」との用例がある。

［松柏声］曹操の陵墓の側に植えられたマツやコノテガシワに吹き付ける風の音。「松柏」は「古詩十九首」（『文選』巻二十九）其十三に「白楊何蕭蕭、松柏夾広路（白楊　何ぞ蕭蕭たる、松柏　広路を夾む）」とあり、李善注は後漢・仲長統「昌言」を引いて「古之葬者、松柏梧桐、以識其墳也。（古の葬は、松柏梧桐、以て其の墳を識すなり。）」というように、墳墓の側に植えられた。北斉・荀仲挙「銅雀台」に「況復帰風便、松声入断弦（況んや復た風便に帰し、松声の断弦に入るをや）」と見える。何遜には「暮秋答朱記室」詩に「桃李爾繁華、松柏余本性（桃李　爾は繁華にして、松柏　余が本性）」との用例があるが、こちらは節操に喩える例。

「昭君怨」

【本文及び書き下し】

1昔聞別鶴弄　　昔　聞く　別鶴弄

2已自軫離情　　已に自ら離情を軫ましむ

3今来昭君曲　　今　来たるに昭君曲あり

4還悲秋草生　　還た悲しむ　秋草の生ずるを

【日本語訳】

1そのむかし「別鶴弄」の曲を耳にしたとき

2二人が別れ別れになる悲しみを思って胸が痛んだのに

3いまここにやって来ると「昭君曲」が聞こえ

4すぐにも枯れてしまうだろう秋の草がさらに悲しく思われるのだ

【校勘】

○『文苑英華』巻二百四。『楽府詩集』巻二十九。『古詩紀』巻九十三。

0『楽府』作「何妥」。張燮本題下注云「『楽府』作『何妥』、非」。

1「別鶴弄」、『校注』【校注】云「原作『白鶴弄』、拠『英華』『楽府』改」。

4「生」、『英華』『楽府』作「並」。

【押韻】

「情」、下平十四清韻。「生」、下平十二庚韻。庚・清同用。

【題解】この詩は『文苑英華』巻二百四・『楽府詩集』巻二十九・『古詩紀』巻九十三に見える。『古詩紀』題下の原注に「『楽府』作『何妥』、非。（『楽府』『何妥』に作る、非なり。）」とある。「昭君怨」は、もと琴曲の名、「昭君詞」と同じく、楽府の詩題であり、「相和歌辞・吟歎曲」に属す。昭君、漢の元帝の宮人　王嬙（『漢書』は「廧（ママ）」に作る）、字は昭君。晋人は司馬昭の諱を避けて、明君に改め、後の人はさらに明妃と呼んだ。漢の南郡秭帰（今、湖北省に属す）の人。竟寧元年（紀元前三三年）、匈奴の呼韓邪単于が入朝し、美人を求めて閼氏（匈奴王の正妻）にしようとし、元帝は昭君を与え、友交を図った。匈奴に入ると、寧胡閼氏と呼ばれた。亡くなると匈奴に葬られた。今の内モンゴル自治区フフホト市の南に昭君の墓があり、「その周囲の草がいつも青々としているので、青塚という」（『太平寰宇記』）と伝える。その事跡は『漢書』匈奴伝、『後漢書』南匈奴伝及び『西京雑記』などに散見される。「昭君恨帝始不見遇、乃作怨思之歌（昭君　帝の始め遇せられざるを恨み、乃ち怨思の歌を作る）」（『楽府解題』）という。後の人がそれによって琴曲「昭君怨」を作った。「漢人憐其遠嫁（漢人　其の遠く嫁ぐを憐れむ）」で「昭君」曲を作り、「晋石崇妓緑珠善舞、以此曲教之、而自製新歌（晋の石崇の妓　緑珠　善く舞ひ、此の曲を以て之れに教へて、自ら新歌を製る）」（『楽府詩集』引『唐書』楽志）、かくて後世の「昭君詞」の出処となった。

【語釈】

1昔聞別鶴弄　2已自軫離情

［昔聞］以前耳にしたことがある。三国魏・阮籍「詠懐」詩八十二首其六（『文選』巻二十三）に「昔聞東陵瓜、近在青門外（昔聞く　東陵の瓜、近く青門の外に在り）」と見える。何遜には「苦熱」詩に「昔聞草木焦、今窺沙石爛（昔聞く草木の焦ぐるを、今窺ふ　沙石の爛るるを）」との用例がある。

［別鶴弄］琴曲の名。「別鶴操」とも。三国魏・嵇康「琴賦」（『文選』巻十八）に「王昭楚妃、千里別鶴。（王昭　楚妃、千里　別鶴。）」と琴曲の名である「王昭」「別鶴」とが並置される。李善注は崔豹『古今注』に「別鶴操、商陵牧子所作也。牧子娶妻五年、無子、父母将為之改娶。妻聞之、中夜起、聞鶴声、倚戸而悲。牧子聞之、愴然歌曰、『将乖比翼隔天端、山川悠遠路漫漫』。攬衣不寝食。後人因以為楽章也。（別鶴操、商陵の牧子の作る所なり。牧子　妻を娶りて五年、子無く、父母　将に之れが為に改めて娶らんとす。妻　之れを聞き、中夜　起き、鶴声を聞き、戸に倚りて悲しむ。牧子　之れを聞き、愴然として歌ひて曰く、『将に比翼に乖（そむ）きて天端に隔たらんとし、山川　悠遠として　路漫漫たり』と。衣を攬（と）りて寝食せず。後人　因りて以て楽章と為すなり。）」とあるのを引く。何遜には「寄江州褚諮議」詩に「因君奏采蓮、為余吟別鶴（君に因りて采蓮を奏す、余が為に別鶴を吟ぜよ）」との用例がある。

［軫］心を痛める。悲しむ。『楚辞』九章・哀郢に「出国門而軫懐兮、甲之鼂吾以行（国門を出でて懐ひを軫（いた）め、甲の鼂（あした）　吾　以て行く）」とあり、王逸注に「軫、痛也。懐、思也。」とある。

［離情］別れの悲しみ。梁・任昉「出郡伝舎哭范僕射」詩（『文選』巻二十三）に「将乖不忍別、欲以遣離情（将に乖（はな）れんとして別るるに忍びず、以て離情を遣らんと欲す）」と。

3今来昭君曲　4還悲秋草生

［今来］今ここにやって来ると。晋・王讃「雑詩」（『文選』巻二十九）に「昔往鶬鶊鳴、今来蟀蟋吟（昔　往きしとき　鶬鶊　鳴き、今　来たるに　蟀蟋　吟ず）」と。

［還悲］昔よりももっと悲しむことになってしまった。梁簡文帝「詩」に「今如白華樹、還悲明鏡前（今　白華の樹の如く、還って悲しむ　明鏡の前）」とあるが、こちらは以前とは逆に、の意。

［秋草］やがて枯れようとする秋の草。「古詩十九首」其八に「傷彼蕙蘭花、含英揚光輝。過時而不采、将随秋草萎（傷む　彼の蕙蘭の花の、英を含みて光輝を揚ぐうを。時を過ぎて采らずんば、将に秋草に随ひて萎れんとす）」とあり、李善注は『楚辞』七諫・沈江（漢・東方朔）に「秋草栄其将実兮、微霜下而夜降（秋草栄えて　其れ将に実らんとし、微霜　下りて　夜　降る）」とあるのを引く。また、晋・石崇「王明君詞」（『文選』巻二十七）に「朝華不足歓、甘与秋草并（朝華歓ぶに足らず、甘んじて秋草と并（あ）はせられん）」とあり、李善注は上の「古詩十九首」其八を引く。

「門有車馬客」

【本文及び書き下し】

1門有車馬客　門に車馬の客有り
2言是故郷来　言ふ　是れ故郷より来たると
3故郷有書信　故郷より書信有り
4縦横印検開　縦横　印検　開く
5開書看未極　書を開きて看て未だ極めず
6行客屢相識　行客　屢しば相ひ識る
7借問故郷来　故郷より来たるに借問すれば
8潺湲涙不息　潺湲として　涙　息まず
9上言離別久　上には離別すること久しと言ひ
10下言望応帰　下には応に帰るべきを望むと言ふ
11寸心将夜鵠　寸心と夜鵠と
12相逐向南飛　相ひ逐ひて南に向かひて飛ばん

【日本語訳】

1門に馬車に乗った客人が訪ねてきて
2「故郷からやって来ました」と言う
3故郷からの手紙を携えていて
4何度も書き加えたのか、乱れた封泥を剥がして手紙を開いた
5手紙を開いて途中まで読んだ時
6ふと見ると門前の道を行き交う人々の多くは顔馴染みだったが
7故郷から訪ねてきた客人にあれこれ問い掛けるうちに
8懐かしさのあまり涙がはらはらとこぼれる
9手紙の前の方には「別れ別れになったまま久しいですね」とあり
10後の方には「帰っていらっしゃるはずのあなたを今か今かとお待ちしております」と言う
11わたしの心は夜空で鳴いているハクチョウとともに
12追いつ追われつしながら南の方へ飛んで行くだろう

【校勘】

○『文苑英華』巻百九十五。『楽府詩集』巻四十。『古詩紀』巻九十三。
0『楽府』原作「何晏」。張溥本・張紘本題下注云「『楽府』作『何妥』、非」。
1「有」、『楽府』作「前」。
7「来」、『楽府』作「人」。
11「鵠」、『英華』『楽府』作「鵲」。

【押韻】

「来」「開」、上平十六咍韻。「識」「息」、入声二十四職韻。「帰」「飛」、上平八微韻。

【題解】この詩は『文苑英華』巻百九十五・『楽府詩集』巻四十・『古詩紀』巻九十三に見える。『古詩紀』題下の原注に「『楽府』作『何妥』、非。(『楽府』　『何妥』に作る、非なり。)」とある。「門有車馬客」は、「門有車馬客行」に作ることもあり、楽府の詩題、「相和歌辞・瑟調曲」に属す。『楽府解題』は「曹植等『門有車馬客行』皆言問訊其客、或得故旧郷里、或駕自京師、備叙市朝遷謝、親友凋喪之意也。(曹植等の『門有車馬客行』　皆な其の客に問訊するを言ひ、或いは故旧郷里を得、或いは駕するに京師よりし、備に市朝の遷謝し、親友の凋喪するの意を叙するなり。)」という。

【語釈】

1門有車馬客　2言是故郷来

[言是] 問い掛けに対する応答に用いる。三国魏・曹植「七哀」詩(『文選』巻二十三。『玉台』巻二作「雑詩」。)に「借問歎者誰、言是客子妻(借問す　歎く者は誰ぞ、言ふ　是れ客子の妻なりと)」とある。

[故郷] ふるさと。漢・班彪「北征賦」(『文選』巻九)に「遊子悲其故郷、心愴恨以傷懐。(遊子　其の故郷を悲しみ、心　愴恨として以て傷み懐ふ。)」とあり、李善注は『漢書』高帝紀下に「上乃起舞、忼慨傷懐、泣数行下。謂沛父兄曰、『遊子悲故郷。吾雖都関中、万歳之後吾魂魄猶思沛』。(上　乃ち起ちて舞ひ、忼慨して傷み懐ひて、泣　数行　下る。沛の父兄に謂ひて曰く、『遊子　故郷を悲しむ。吾　関中に都すと雖も、万歳の後　吾が魂魄　猶ほ沛を思はん』と。)」とあるのを引く。何遜には「日夕出富陽浦口和朗公」詩に「故郷千余里、茲夕寒無衣(故郷　千余里、茲の夕べ　寒くして衣無し)」、「敬酬王明府僧孺」詩に「念別已零涙、況乃思故郷(別れを念へば已に涙を零とし、況んや乃ち故郷を思ふをや)」、「辺城思」詩に「春色辺城動、客思故郷来(春色　辺城に動き、客思　故郷より来たる)」、との用例がある。

3故郷有書信　4縦横印検開

[書信] 手紙。『晋書』陸機伝に「我家絶無書信、汝能齎書取消息不。(我が家　絶えて書信無ければ、汝　能く書を齎して消息を取るや不や。)」と見える。

[縦横] 秩序なく乱れた様。何度も手紙に書き加えたことをいう。宋・顔延之「秋胡」詩(『文選』巻二十一)に「離獣起荒蹊、驚鳥縦横去(離獣　荒蹊に起こり、驚鳥　縦横に去る)」とある。

[印検] 手紙を括った紐の結び目の封泥に押された印。六朝詩には他の用例は見当たらない。『後漢書』公孫瓚伝に「(袁紹)矯刻金玉以為印璽、毎有所下、輒皁囊施検、文称詔書。((袁紹)矯りて金玉を刻みて以て印璽を為り、下す所有る毎に、輒ち皁囊に検を施し、文に詔書と称す。)」とある。四句、手紙が届き、心急くままに開いたところまでを描く。

5開書看未極　6行客屢相識

[開書] 手紙を開く。六朝詩にはあまり用例が見当たらない。『宋書』沈攸之伝に「(江州刺史桂陽王休範)送付攸之門者、攸之不開書。((江州刺史桂陽王休範)攸之の門者に送付するも、攸之　書を開かず。)」と。

[看未極] まだ読み終えていない。「未極」は最後までは到達していない。謝朓「敬亭山」詩(『文選』巻二十七)に「緣源殊未極、帰径窅如迷(源に縁りて殊に未だ極めざるに、帰径　窅くして迷ふが如し)」とある。何遜には「哭呉興柳惲」詩に「翰飛矯未極、朝露溘先危(翰飛　矯びて未だ極めざるに、朝露　溘ち先んじて危ふし)」、「贈江長史別」詩に「離舟歓未極、別至悲無語(離舟　歓び　未だ極めざるに、別れ　至りて　語無きを悲しむ)」との用例がある。また、梁武帝蕭衍「代蘇属国婦」詩(『玉台』巻七)に「帛上看未終、臉下涙如糸(帛上　看て未だ終はらざるに、臉下　涙　糸の如し)」とまだ手紙を読み終えていない状態を描く。

[行客] 旅人。「古詩十九首」其三に「人生天地間、忽如遠行客(人　天地の間に生くるは、忽として遠行の客の如し)」とあり、李善注は『列子』天瑞に「言死人為帰人、則生人為行人矣。(死人を言ひて帰人と為せば、則ち生人は行人為り。)」とあるのを引くので、「行人」とほぼ同じだろう。ここは「門」の前を行き交う人々。

[相識] 顔見知り、知人。晋・謝尚「大道曲」に「車馬不相識、音落黄埃中(車馬　相ひ識らず、音　黄埃の中に落つ)」とあるのは洛陽の街の喧噪を述べる。何遜の「学古」詩三首其二「渾渾車馬道、行人不相識(渾渾たり　車馬の道、行人　相ひ識らず)」は同じく洛陽の喧噪を描くが、日が沈もうとして辺りが薄暗くなったことをいう。ここで「ほとんどが顔見知り」と詠うのは土地に馴染んでいることをいうと解した。

7借問故郷来　8潺湲涙不息

[借問] 試みに訊ねる。曹植「白馬篇」(『文選』巻二十七)に「借問誰家子、幽并遊侠児(借問す　誰が家の子ぞ、幽并の遊侠児)」とあるように、上句は「借問」のすぐ後に問いが置かれ、下句はその答えとなるのが一般的。

[故郷来] 故郷から来た客人。ここは問い掛けた相手として解した。

[潺湲] 水が流れる様。また涙がこぼれる様。畳韻。『楚辞』九弁に「倚結軨兮太息、涕潺湲兮霑軾(結軨に倚りて太息し、涕　潺湲として軾を霑す)」とある。

[不息] 止まらない。宋・無名氏「華山畿」二十五首其十二に「涙如漏刻水、昼夜流不息(涙　漏刻の水の如く、昼夜　流れて息まず)」と見える。何遜には「送韋

司馬別」詩に「蛍飛飛不息、独愁空転側（蛍　飛び飛んで息まず、独り愁へて空しく転側す）」との用例がある。四句、手紙の途中までを読んだ時の様子。門前を行き交う人々の多くが顔見知りであっても、手紙を届けてくれた人が我が故郷から来てくれたのだということ知ると涙が溢れる。

9上言離別久　10下言望応帰

［上言～下言～］手紙の前の部分には～とあり、後には～とある。「古詩十九首」其十七「上言長相思、下言久離別（上には長く相ひ思ふと言ひ、下には久しく離別すと言ふ）」とあるのに基づく。

［離別］別れ別れになる。何遜には「学古贈丘永嘉征還」詩に「相悲涙欲下、離別方自陳（相ひ悲しみて　涙下らんと欲し、離別　方に自ら陳べん）」との用例がある。

［望応帰］帰って来るはずのあなたを遠く眺めている。「応帰」の語は何遜「贈江長史別」詩に「遠送子応帰、棹開帆欲挙（遠く送る　子の応に帰らんとすべきを、棹は開き　帆は挙がらんと欲す）」との用例がある。

11寸心将夜鵠　12相逐向南飛

［寸心］心のこと。晋・陸機「文賦」（『文選』巻十七）に「函綿邈於尺素、吐滂沛乎寸心。（綿邈を尺素に函み、滂沛を寸心に吐く。）」とあり、李善注は『列子』仲尼を引いて「文摯謂叔龍曰、『吾見子之心矣。方寸之地虚矣』。（文摯　叔龍に謂ひて曰く、『吾　子の心を見たり。方寸の地　虚し』と。）」という。何遜には「秋夕仰贈従兄寘南」詩に「寸心懐是夜、寂寂漏方賒（寸心　是の夜を懐ひ、寂寂として　漏　方に賒し）」、「学古」詩三首其二「寸心空延佇、対面何由即（寸心　空しく延佇し、対面　何に由りてか即かん）」、「夜夢故人」詩に「相思不可寄、直在寸心中（相ひ思ふも寄すべからず、直だ寸心の中に在るのみ）」、「為人妾怨」詩（『玉台』巻十作「為人妾思」。）に「寸心君不見、拭涙坐調絃（寸心　君　見ずや、涙を拭ひて坐して絃を調す）」との用例があって、六朝詩人中では抜きん出て多い。

［夜鵠］夜、鳴きながら空を渡るハクチョウ。斉・孔稚珪「北山移文」（『文選』巻四十三）に「蕙帳空兮夜鵠怨、山人去兮暁猿驚。（蕙帳空兮夜鵠怨、山人去兮暁猿驚。）」と見える。漢・蘇武「詩」四首（『文選』巻二十九）其二に「黄鵠一遠別、千里顧徘徊（黄鵠　一たび遠く別れ、千里　顧みて徘徊す）」とあるように遠くまで飛んで行く鳥。

［相逐］追いつ追われつする。宋・荀昶「擬青青河辺草」（『玉台』巻三）に「他邦各異邑、相逐不相及（他邦各おの邑を異にし、相ひ逐ひて相ひ及ばず）」とある。また、梁・庾肩吾「賦得有所思」（『玉台』巻八作「詠得有所思」。）に「不及銜泥燕、従来相逐飛（及ばず泥を銜むの燕の、従来　相ひ逐ひて飛ぶに）」と。

［向南飛］南に飛んでいく。斉・陸厥「南郡歌」に「旅雁向南飛、浮雲復如蓋（旅雁　南に向かひて飛び、浮雲　復た蓋の如し）」とある。四句、手紙を最後まで読んでからの様子。

「擬軽薄篇」

【本文及び書き下し】

1 城東美少年　城東の美少年
2 重身軽万億　身を重んじ　万億を軽んず
3 柘弾隋珠丸　柘の弾　隋珠の丸
4 白馬黄金飾　白馬　黄金の飾り
5 長安九逵上　長安　九逵の上
6 青槐蔭道植　青槐　道を蔭ひて植う
7 轂撃晨已喧　轂撃　晨には已に喧しく
8 肩排暝不息　肩排　暝も息まず
9 走狗通西望　走狗　西に通じて望み
10 牽牛亘南直　牽牛　南に亘りて直し
11 相期百戯傍　相ひ期す　百戯の傍
12 去来三市側　去来す　三市の側
13 象牀沓繡被　象牀　繡被を沓ね
14 玉盤伝綺食　玉盤　綺食を伝ふ
15 倡女掩扇歌　倡女　扇に掩はれて歌ひ
16 小婦開簾織　小婦　簾を開きて織る
17 相看独隠笑　相ひ看ては独り笑ひを隠し
18 見人還斂色　人を見ては還た色を斂む
19 黄鵠悲故群　黄鵠　故群を悲しみ
20 山枝詠新識　山枝　新識を詠ず
21 烏飛過客尽　烏　飛びて　過客　尽き
22 雀聚行龍匿　雀　聚まりて　行龍　匿る
23 酌羽方厭厭　羽に酌みて　方に厭厭たり
24 此時歓未極　此の時　歓び　未だ極まらず

【日本語訳】

1 長安城の東、美々しく装う若者は
2 我が身は大切にしても、その他大勢のことなど眼中にない
3 ヤマグワの弾き弓に、弾丸は隋侯の真珠
4 白馬に黄金の飾り
5 長安の大通りには
6 両側に青青と葉の茂るエンジュが植えられている
7 こしきをぶつけ合ってにぎやかに行き交う車の音で朝からすでに騒がしく
8 肩と肩を擦り合わせる人々は雑踏は日暮れになってもまだおさまらない
9 大通りは西に走狗台を見晴るかせ
10 牽牛橋からまっすぐ南にのびている
11 サーカスの近くで落ち合おうと約束を交わし
12 マーケットの辺りを行ったり来たり
13 妓楼では象牙の敷物に刺繍された掛け蒲団を重ね

14玉製の平皿は次々にご馳走を運んで来る
15歌姫が扇で顔を隠しながら歌い
16家では若い妻がカーテンを開けたままお帰りは今か今かと機を織っているだろうに
17歌姫の方は見つめ合ってもこっそり笑うばかり
18他人の姿が見えたら元通りすまし顔
19「黄鵠」の歌で、亡き夫を偲んでこのまま独り身でいたいと歌い
20「山枝」の歌で、新しい恋人ができた嬉しさを顔に出さないので、あの人はご存じないと歌う
21カラスが塒に帰る頃、道行く人の姿も消え
22スズメが集まって来て、日が沈んでいく
23スズメの形をした酒杯で心穏やかに酌み交わす
24夜を迎えた今この時になっても、まだまだ楽しみは尽きない

【校勘】
○『玉台新詠』巻五。『芸文類聚』巻三十四引億・飾・植・息・直・側・食七韻。『芸文類聚』巻四十二引億・飾・側・食・織・色六韻。『文苑英華』巻百九十四。『楽府詩集』巻六十七。『古詩紀』巻九十三。
0「擬軽薄篇」、除『類聚』三十三・『詩紀』外均作「軽薄篇」。
1「城東」、『類聚』巻四十二作「長安」、『楽府』注云「一作『長安』」。「少年」、『類聚』四十二作「年少」。
4「飾」、『玉台』作「勒」、『詩紀』注云「一作『勒』」。
6「蔭」、『英華』作「陰」、而注云「一作『蔭』」。
8「排」、『類聚』三十三作「摩」。「暝」、『玉台』『類聚』三十三均作「暗」。
9「通」、『楽府』作「東」。「西」、『英華』作「四」、注云「一作『息』」。
10「亘」、『楽府』作「向」、『英華』注云「一作『向』」。
15「倡女」、『楽府』作「大姉」、注云「一作『娼女』」。「扇歌」、『校注』注云「原作『歌扇』」、拠『玉台』『英華』『楽府』・薛本改」。『詩紀』・張紘本・薛本・張燮本作「歌扇」。
16「婦」、『楽府』作『妹』、注云「一作『婦』」。
19「鵠」、『玉台』『英華』『楽府』作「鶴」。
20「枝」、薛本作「川」。「新」、『玉台』作「初」。
21「烏」、『玉台』『英華』・張紘本作「鳥」。
23「羽」、『英華』作「酒」。「方」、清・紀容舒『玉台新詠考異』注云「宋刻作『前』、不甚可解、今従『古楽府』」。
24「未」、『英華』作「無」。

【押韻】
「億」「飾」「植」「息」「直」「側」「食」「織」「色」「識」「匿」「極」、入声二十四職韻。

【題解】この詩は『玉台新詠』巻五・『芸文類聚』巻四十二・『文苑英華』巻百九十四・『楽府詩集』巻六十七・

『古詩紀』巻九十三に見え、『古詩紀』以外はいずれも題を「軽薄篇」とする。「軽薄篇」は、楽府の詩題、雑曲歌辞に属す。郭茂倩は『楽府解題』を引いて「『軽薄篇』、言乗肥馬、衣軽裘、馳逐経過為楽、与『少年行』同意。何遜云『城東美少年』、張正見云『洛陽美少年』是也。(『軽薄篇』、言肥馬に乗り、軽裘を衣(き)て、馳逐経過するを楽しみと為すを言ひ、『少年行』と意を同じくす。何遜の『城東の美少年』と云ひ、張正見の『洛陽の美少年』と云ふは是れなり。)」という。「擬」、模倣する。この詩は何遜が貴族の子弟が遊楽に耽るのを歎いて作ったのかもしれない。

【語釈】
1城東美少年　2重身軽万億
[城東]長安城の東。「城東」の語は漢・宋子侯「董嬌饒」詩に「洛陽城東路、桃李生路傍(洛陽　城東の路、桃李　路傍に生ず)」とあるように洛陽と結び付くことが多い。
[美少年]美々しく飾り立てた若者。ここは游侠を気取る軽薄な若者といったニュアンスだろう。梁元帝蕭繹「紫騮馬」に「長安美少年、金絡鉄連銭(長安　美少年、金絡　鉄連銭)」の句がある。何遜には「学古」詩三首其一に「長安美少年、羽騎暮連翩(長安の美少年、羽騎　暮れに連翩たり)」とのよう例があるが、梁代以前の詩には用例は見当たらない。
[重身]我が身を大切にする。通常は北周・王褒「従軍行」二首其二に「年少多遊侠、結客好軽身(年少　遊侠多く、結客　好んで身を軽んず)」とあるように、游侠少年たちは「軽身」と表現されることの方が多い。その場合は漢・張衡「西京賦」(『文選』巻二)に「都邑游侠、張趙之倫(ともがら)。……。軽死重気、結党連群。(都邑の游侠、張趙の倫。……。死を軽んじ気を重んじ、党を結び群を連ぬ。)」のように自らの生死を度外視することを言う。「重身」は他者の存在を顧みないことを言うのだろう。
[万億]数が多いことをいうが、ここは多くの人々を指す。『尚書』泰誓上に「受有臣億万、惟億万心。(受に臣億万有れども、惟ち億万の心なり。)」とある。

3柘弾隋珠丸　4白馬黄金飾
[柘弾]ヤマグワで作った弾き弓。「柘」はよい木材になる。梁以前の詩には他の用例は見当たらない。梁・車敷「驄馬」に「驄馬鏤金鞍、柘弾落金丸(驄馬　鏤金の鞍、柘弾　金丸落つ)」とある。
[隋珠]隋侯の真珠。『淮南子』覧冥訓に「譬如隋侯之珠、和氏之璧、得之者富、失之者貧。(譬へば隋侯の珠、和氏の璧の如く、之れを得る者は富み、之れを失ふ者は貧し。)」とあり、その高誘注に「隋侯見大蛇傷断、以薬傅之。後蛇於江中銜大珠以報之。因曰隋侯之珠。蓋明月珠也。(隋侯　大蛇の傷断するを見、薬を以て之れ

に傳く。後　蛇　江中に於いて大珠を銜みて以て之れに報ゆ。因りて隋侯の珠と曰ふ。蓋し明月の珠ならん。)”という。斉・王融「雑体報范通直」詩に「和璧荊山下、隋珠漢水浜（和璧　荊山の下、隋珠　漢水の浜）」と見える。

［白馬黄金飾］黄金の馬具で飾られた白馬。曹植「白馬篇」に「白馬飾金羈、連翩西北馳（白馬　を飾り、連翩として西北に馳す）」とあるのに拠る。

5長安九逵上　6青槐蔭道植

［九逵］四方八方に繋がる道。都大路。『三輔黄図』都城十二門に『三輔決録』を引き、「長安城、面三門、四面十二門、皆通達九逵、以相経緯。（長安城、面　三門、四面　十二門、皆な九逵に通達し、以て相ひ経緯す。）」とある。謝朓「阻雪連句遥贈和」に「九逵密如繡、何異遠別離（九逵　密なること繡の如く、何ぞ遠別離に異ならん）」と見える。

［青槐］都大路に植えられ、春、青々とした葉が繁るエンジュ。王融「雑体報范通直」詩に「紫庭風日好、青槐枝葉新（紫庭　風日　好く、青槐　枝葉　新たなり）」とある。また、梁元帝「洛陽道」に「青槐随幔払、緑柳逐風低（青槐　幔に随ひて払ひ、緑柳　風を逐ひて低る）」と見えるが、梁代以降は都の風物として描かれることが多い。

［蔭道植］繁った葉が道を覆うように植えられた。謝朓「鼓吹曲」（『文選』巻二十八）に「飛甍夾馳道、垂楊蔭御溝（飛甍　馳道を夾み、垂楊　御溝を蔭ふ）」とある。

7轂擊晨已喧　8肩排暝不息

［轂擊］こしきがぶつかり合う。「轂」は車輪の中央で輻（スポーク）が集まっている所。車の往来が盛んなこと。左思「魏都賦」（『文選』巻六）に「百隧轂擊、連軫万貫。（百隧　轂擊し、軫を連ぬること万貫なり。）」とあり、劉逵注は『史記』蘇秦列伝に「臨菑之塗、車轂擊、人肩摩、連衽成帷、挙袂成幕。（臨菑の塗、車轂　擊ち、人肩　摩し、衽を連ねて帷を成し、袂を挙げて幕を成す。）」とあるのを引く。六朝詩には他の用例は見当たらない。

［肩排］肩が並ぶ。人の往来が盛んなこと。『史記』蘇秦列伝に見えた「人肩摩」と同じような意味だろう。「排」は並び連ねる。六朝詩には他の用例は見当たらない。陳・周弘正「梁典総論」に「執経者連袂、負笈者排肩。（経を執る者は袂を連ね、笈を負ふ者は肩を排ぶ。）」と見える。

［暝］薄暗いの意だが、ここは夜、また夕暮れ。何遜「宿南洲浦」詩に「解纜及朝風、落帆依暝浦（纜を解くは朝風に及び、帆を落とすは暝浦に依る）」とある。

9走狗通西望　10牽牛亘南直

［走狗］漢代の物見台。『三輔黄図』巻五「台榭」に「長楽宮有魚池台、酒池台、秦始皇造。又有著室台、鬬鶏台、走狗台、壇台、漢韓信射台。（長楽宮に魚池台、酒池台有り、秦始皇　造る。又た著室台、鬬鶏台、走狗台、壇台、漢韓信射台有り。）」と見えるが、この意味での用例は六朝詩には他に見当たらない。

［通西望］西の方を見渡せる。「通」はあまねく、すべて。

［牽牛］渭水に架かる中渭橋の異称。『三輔黄図』巻一「咸陽故城」に「渭水貫都、以象天漢。横橋南度、以法牽牛。（渭水　都を貫きて、以て天漢に象る。横橋　南度して、以て牽牛に法る。）」とある。後の例だが、陳・蕭賁「長安道」（『楽府』巻二十三。『芸文類聚』巻四十二作「梁元帝『長安路詩』」。）に「城形類北斗、橋勢似牽牛（城は　形　北斗に類し、橋は　勢ひ　牽牛に似る）」と見える。

［亘南直］南に真っ直ぐ架かっている。「亘」は橋を架け渡す。張衡「西京賦」に「亘雄虹之長梁、結棼橑以相接。（雄虹の長梁を亘し、棼橑を結びて以て相ひ接す。）」とあり、薛綜注に「亘、径度也。」とある。

11相期百戯傍　12去来三市側

［相期］約束する。「相期」のすぐ後に場所を取る例は、やや後になるが梁・呉均「詠雪」詩に「坐須風雪霽、相期洛城下（坐して須つ　風雪の霽るるを、相ひ期す　洛城の下）」とある。

［百戯］様々な芸能の総称。語は『後漢書』安帝紀に「乙酉、罷魚龍曼延百戯。（乙酉、魚龍曼延百戯を罷む。）」と見え、李賢注に「『漢官典職』曰、『作九賓楽。舍利之獣従西方来、戯於庭、入前殿、激水化成比目魚、嗽水作霧、化成黄龍、長八丈、出水遨戯於庭、炫耀日光』。（『漢官典職』に曰く、『九賓楽を作る。舍利の獣　西方より来たり、庭に戯れ、前殿に入り、水を激して化して比目魚と成り、水を嗽ぎて霧を作り、化して黄龍と成り、長さ八丈、水より出でて庭に遨戯し、日光に炫耀す』と。）」とある。何遜以前の用例は見当たらないが陳・徐陵「洛陽道」二首其一に「緑柳三春暗、紅塵百戯多（緑柳　三春　暗く、紅塵　百戯　多し）」と見える。

［去来］行ったり来たりする。王融「芳樹」に「去来徘徊者、佳人不可遇（去来徘徊する者は、佳人不可遇佳人に遇ふべからざればならん）」と。

［三市］大きな市場。朝市、午後の市、夕市を三市という。左思「魏都賦」に「廓三市而開廛、籍平逵而九達。（三市を廓くして廛を開き、平逵の九達に籍る。）」とあり、劉逵注は『周礼』地官・司市に「大市日昃而市、百族為主。朝市朝時而市、商賈為主。夕市夕時而市、販夫販婦為主。（大市は日　昃きて市し、百族を主と為す。朝市は朝時にして市し、商賈を主と為す。夕市は夕時にして市し、販夫販婦を主と為す。）」とあるのを引く。

13 象牀沓繡被　14 玉盤伝綺食

［象牀］象牙で作った敷物。『戦国策』斉策に「孟嘗君出行国至楚。献象牀。郢之登徒直使送之、不欲行。（孟嘗君　出でて国を行り楚に至る。象牀を献す。郢之登徒　使ひして之れを送るに直たり、行くを欲せず。）」とあり、鮑彪注に「象歯為牀。（象歯もて牀を為る。）」という。詩では鮑照「代白紵舞歌詞」四首其二に「象牀瑤席鎮犀渠、雕屏匼匝組帷舒（象牀　瑤席　犀渠を鎮へ、雕屏　匼匝して　組帷　舒ぶ）」と見える。

［沓］かさねる。

［玉盤］玉で作った平皿。張衡「四愁詩」四首（『文選』巻二十九。『玉台』巻九。）其二に「美人贈我金琅玕、何以報之双玉盤（美人　我に金琅玕を贈る、何を以てか之れに報いん　双玉盤）」（「金」、『玉台』作「琴」。六臣注本『文選』注云「五臣作『琴』」。）とあり、李善注は「古詩」三首其一に「委身玉盤中、歴年　食せられんことを冀ふ）」（身を玉盤の中に委ね、歴年　食せられんことを冀ふ）」とあるのを引く。

［伝］運ぶ、移す。

［綺食］ご馳走。六朝詩には他の用例は見当たらない。

15 倡女掩扇歌　16 小婦開簾織

［倡女］歌舞を生業とする女性。「娼女」とも。梁簡文帝「豔歌篇十八韻」（『玉台』巻七）に「凌晨光景麗、倡女鳳楼中（凌晨　光景　麗らかなり、倡女　鳳楼の中）」とある。

［掩扇歌］顔を扇で隠しながら歌う。北魏・温子昇「安定侯曲」に「美人当窓舞、妖姫掩扇歌（美人　窓に当たりて舞ひ、妖姫　扇に掩はれて歌ふ）」とある。清・呉兆宜『玉台新詠箋注』は『九家集注杜詩』巻十八「城西陂泛舟」詩の「魚吹細浪揺歌扇、燕蹴飛花落舞筵（魚は細浪を吹きて歌扇を揺らし、燕は飛花を蹴りて舞筵に落とす）」に王洙が「以扇自障而歌、故謂之『歌扇』。（扇を以て自ら障りて歌ふ、故に之れを『歌扇』と謂ふ。）」と注するのを引く。「掩扇」の語は『晋書』武元楊皇后伝に「時卞藩女有美色、帝掩扇謂后曰、『卞氏女佳』。（時に卞藩の女に美色有り、帝　扇に掩はれて后に謂ひて曰く、『卞氏の女　佳し』と。）」と見える。

［小婦］兄弟の内、一番下の弟の妻。楽府「長安有狭斜行」古辞に「大婦織綺紵、中婦織流黄。小婦無所為、挾琴上高堂（大婦は綺紵を織り、中婦は流黄を織る。小婦は為す所無く、琴を挾みて高堂に上る）」とあり、楽府「三婦艶」にもしばしば現れるが、「小婦」は何もしないのが一般的。大村和人氏「〝巫〟から〝小婦〟へ―楽府『三婦艶』の小婦について―」（『日本中国学会報』第五十七集　二〇〇五）に詳しい。

［開簾］カーテンを開いたまま。鮑照「在江陵歎年傷老」詩に「開簾窺景夕、備属雲物好（簾を開きて景の夕べなるを窺ひ、備に雲物の好きに属す）」とあり、何遜には「夜夢故人」詩に「開簾覚水動、映竹見牀空（簾を開きて水の動くを覚え、竹を映して牀の空しきを見る）」との用例がある。

［織］機を織る。機を織りながら夫の帰りを待ちわびる若い妻というモチーフは例えば謝朓「同王主簿有所思」に「佳期期未帰、望望下鳴機（佳期　期するも未だ帰らず、望望として鳴機を下る）」と見られ、何遜自身にも「学古贈丘永嘉征還」詩に「窺見応門出、遥識下機人（窺ひ見る　応門の出づるを、遥かに識る　機を下る人）」との表現が見られる。

17 相看独隠笑　18 見人還斂色

［相看］見つめ合う。梁・沈約「六憶」詩（『玉台』巻五）四首其一に「相看常不足、相見乃忘飢（相ひ看るも常に足らず、相ひ見れば乃ち飢えを忘る）」とある。何遜には「詠舞」詩（『玉台』巻五作「詠舞妓」。）に「日暮留嘉客、相看愛此時（日　暮れて　嘉客を留め、相ひ看て此の時を愛す）」とのよう例がある。

［隠笑］こっそり笑う。六朝詩には他の用例は見当たらない。

［見人］他の人の姿が見えると。梁簡文帝「三月三日率爾成詩」に「相看隠緑樹、見人還自嬌（相ひ看て緑樹に隠れ、人を見れば還た自ら嬌たり）」とある。

［斂色］居住まいを正す。すまし顔をする。梁・王訓「応令詠舞」詩に「傾腰逐韻管、斂色聴張絃（腰を傾けて韻管を逐ひ、色を斂めて張絃を聴く）」とある。

19 黄鵠悲故群　20 山枝詠新識

［黄鵠］ハクチョウ。蘇武「詩」四首（『文選』巻二十九）に「黄鵠一遠別、千里顧徘徊。胡馬失其群、思心常依依（黄鵠　一たび遠く別れ、千里　顧みて徘徊す。胡馬　其の群れを失ひ、思心　常に依依たり）」とあり、孤独のイメージを伴う。

［悲故群］仲間と別れ別れになったことを悲しむ。『玉台新詠箋注』は『列女伝』貞順伝に「陶嬰者、魯陶門之女也。少寡、養幼孤、無強昆弟、紡績為産。魯人或聞其義、将求焉。嬰聞之、恐不得免、作歌明己之不更二也。其歌曰、『悲黄鵠之早寡兮、七年不双。宛頸独宿兮、不与衆同。……』。（陶嬰は、魯の陶門の女なり。少くして寡たるも、幼孤を養ひ、強昆弟無きも、紡績して産を為す。魯人　或いは其の義を聞き、将に焉れを求めんとす。嬰　之れを聞き、免るるを得ざるを恐れ、歌を作りて己の更二せざるを明らかにするなり。其の歌に曰く、『黄鵠の早く寡たるを悲しみ、七年　双せず。頸を宛げて独宿し、衆と同にせず。……』。）」とあるのを引く。「故群」の語は沈約「夕行聞夜鶴」（『玉台』巻九）に「自此別故群、独向瀟湘渚（此れより故群に別れ、独り瀟湘の渚に向かふ）」とあるのを引く。

［山枝］わたしがあなたを思う気持ちは、山に木があり木に枝があるのと同じく、ごく当たり前のこと。『玉台』

巻九「越人歌」に「山有木兮木有枝、心悦君兮君不知（山に木有り　木に枝有り、心　君を悦べども　君知らず）」とあり、その序に「楚鄂君子脩者、乗青翰之舟、張翠羽之蓋。榜枻越人悦之、櫂檝而越歌以感。鄂君歓然挙繡被而覆之。（楚の鄂君　子脩なる者、青翰の舟に乗り、翠羽の蓋を張る。榜枻の越人　之れを悦び、櫂檝（たうしふ）　越歌して以て感ぜしむ。鄂君　歓然として繡被を挙げて之れを覆ふ。）」とあるのに基づく。この故事は多少の異同があるが『説苑』善説に見える。

［新識］新たな友人。「新知」と同じような意味だろうが、六朝詩には他の用例は見当たらない。『楚辞』九歌・少司命に「悲莫悲兮生別離、楽莫楽兮新相知（悲しきは生別離より悲しきは莫く、楽しきは新相知より楽しきは莫し）」とある。

21 烏飛過客尽　22 雀聚行龍匿

［烏飛］カラスが塒へ帰って行く。『玉台』は「鳥」に作る。鳥であれば何遜には「渡連圻」詩二首其二に「暮潮還人浦、夕鳥飛向家（暮潮　還りて浦に入り、夕鳥　飛びて家に向かふ）」との用例があるが、「烏」はこの詩以外には用例が見当たらない。

［過客］「行人」と同じく道を行き交う人。『老子』第三十五章に「楽与餌、過客止。（楽と餌とには、過客　止まる。）」と見える。

［雀聚］スズメが集まって来る。

［行龍］天空を行く龍。ここは太陽のこと。晋・郭璞「遊仙詩」十九首其四（『文選』巻二十一）に「六龍安可頓、運流有代謝（六龍　安くんぞ頓（とと）むべけんや、運流して代謝有り）」とあり、李善注は漢・劉向「九嘆・遠遊」に「貫鴻濛以東朅兮、維六龍於扶桑。（鴻濛（こうもう）を貫きて以て東に朅（さ）り、六龍を扶桑に維（つな）ぐ。）」とあるのを引く。太陽は六頭の龍に引かせた車に乗って天空を行くと考えられた。

23 酌羽方厭厭　24 此時歓未極

［酌羽］酒を酌み交わす。「羽」は「羽觴」の略。スズメが翼を広げた形に似せた酒杯。『漢書』外戚伝下・班倢伃に「顧左右兮和顔、酌羽觴兮銷憂。（左右を顧みて和顔を和らげ、羽觴に酌みて憂ひを銷す。）」とある。

［厭厭］心安らかな様。『詩経』小雅・湛露に「厭厭夜飲、不醉無帰（厭厭たる夜飲は、酔はずんば帰る無かれ）」とあり、毛伝に「厭厭、安也。」と。

［此時］今この時。謝朓「別王丞僧孺」詩に「如何当此時、別離言与宴（如何ぞ　此の時に当たり、別離せんとして言に与（とも）に宴す）」とある。何遜には「詠舞」詩に「日暮留嘉客、相看愛此時（日暮　嘉客を留め、相ひ看て此の時を愛す）」との用例がある。

［歓未極］たのしみはまだまだ尽きることがない。梁武帝「碧玉歌」（『玉台』巻十）に「杏梁日始照、蕙席歓未極（杏梁　日　始めて照らし、蕙席　歓び　未だ極

まらず）」と見える。また、蘇武「詩」四首（『文選』巻二十九）其四には「嘉会難両遇、懽楽殊未央（嘉会　両びは遇ひ難し、懽楽　殊に未だ央（つ）きず）」とある。「懽」は「歓」に通じる。

「苦熱」

【本文及び書き下し】

1 昔聞草木焦　昔　聞く　草木　焦ぐと
2 今窺沙石爛　今　窺ふ　沙石の爛るるを
3 噎噎風逾静　噎噎（えいえい）として　風　逾いよ静かに
4 曈曈日漸旰　曈曈（とうとう）として　日　漸く旰（く）る
5 習静閟衣巾　静けきに習ひて衣巾に閟（と）ぢられ
6 読書煩几案　書を読みて几案に煩せらる
7 臥思清露浥　臥して思ふ　清露の浥（うるほ）ふを
8 坐待高星燦　坐して待つ　高星の燦たるを
9 蝙蝠戸中飛　蝙蝠　戸中に飛び
10 蠛蠓窓間乱　蠛蠓（べつぼう）　窓間に乱る
11 実無河朔飲　実に河朔の飲無く
12 空有臨淄汗　空しく臨淄の汗有り
13 遺金不自拾　遺金　自ら拾はず
14 悪木寧無幹　悪木　寧ぞ幹無からんや
15 願以三伏晨　願はくは三伏の晨（あした）を以て
16 催促九秋換　九秋に催促して換はらしめんことを

【日本語訳】

1 以前、草や木が焼け焦げたと耳にしたことがあるが
2 今、砂や石が焼け爛れるのをそっと見ている
3 だんだんと薄暗くなる中、風がますます穏やかになっていき
4 日が次第に沈んでいき、日の光が弱まっていく
5 穏やかな暮らしに慣れ親しもうとしても、この暑さの中、衣や冠を身に着けていなければならず
6 本を読もうとしても、机の熱さで頭が痛くなる
7 横になったまま清らかな露の潤いを思い
8 座ったまま空の高いところで瞬く星の輝きを待つ
9 コウモリが門扉の内側に飛び交い
10 ヌカカが部屋の中に乱れ飛ぶ
11 実際のところ、黄河の北で得られるという夏の暑さを癒やす飲み物もなく
12 臨淄のような大都会で見られる雨のような汗が無駄に流れるだけなのだ
13 この暑さの中、皮衣を着るような貧乏な人であっても道に落ちた金を拾うことなどないが
14 その名の故に木陰で休むことをしない「悪木」という名の木にだって、日陰を作る枝がないわけではないだろう
15 一年で最も暑い三伏の朝を
16 季節の移り変わりを急き立てて秋に取って換わってもらいたいと願うのだ

【校勘】

○『文苑英華』巻二百十。『楽府詩集』巻六十五。『古今事文類聚』前集巻九。『古詩紀』巻九十三。『芸文類聚』巻五引爛、旰、案、燦、乱、汗六韻。

0「苦熱」、『楽府』作「苦熱行」。

1「焦」、『類聚』『英華』作「燋」。

2「窺」、『類聚』『英華』『楽府』『事文』皆作「覩」。『詩紀』注云「一作『覩』」。『校注』注同。

3「逾」、『楽府』作「愈」。

5「閟」、『類聚』『楽府』『事文』並作「悶」。『英華』『詩紀』『校注』皆注云「一作『悶』」、『英華』注又云「『閟』集作『屏』」。「巾」、『類聚』『事文』作「襟」。

7「浥」、『英華』作「挹」、注云「一作『浥』」。

8「高」、『楽府』作「明」。『英華』注云「一作『明』」。

9「中」、『楽府』作「間」。

10「間」、『楽府』作「中」、『英華』同、注云「一作『間』」。「窓」、『英華』注云「集作『裯』」。

11「実」、『楽府』作「会」。

13「不自」、『英華』『楽府』『事文』並作「自不」。

【押韻】亂

「爛」「旰」「案」「燦」「汗」「幹」、去声二十八翰韻。「乱」「換」、去声二十九換韻。翰・換同用。

【題解】この詩は『芸文類聚』巻五・『文苑英華』巻二百十・『楽府詩集』巻六十五・『古詩紀』巻九十三に見える。『楽府』は題を「苦熱行」に作る。

陳祚明は「切而能暢。『実無』二句、可称大雅。（切にして能く暢ぶ。『実無』の二句、大雅と称すべし。）」（『采菽堂古詩選』）と述べる。

【語釈】

1昔聞草木焦　2今窺沙石爛

［昔聞］「昭君怨」第1句「昔聞別鶴弄」【語釈】参照。

［草木焦］草や木が暑さで焼け焦げる。魏・応璩「与広川長岑文瑜書」（『文選』巻四十二）に「璩白、頃者炎旱、日更増甚、沙礫銷鑠、草木焦卷。（璩　白す、頃者　炎旱あり、日に更に増ます甚しく、沙礫　銷鑠し、草木　焦卷す。）」とあり、李善注は『説苑』君道に「湯之時大旱七年、雒坼川竭、煎沙爛石。（湯の時　大いに旱すること七年、雒は坼け川は竭きて、沙を煎り石を爛れしむ。）」とあるのを『呂氏春秋』の文として引き、郭璞「山海経図贊」海外東経・十日に「十日並出、草木焦枯。（十日　並び出で、草木　焦枯す。）」（『芸文類聚』巻一）とあるのを『山海経』の文として引く。

［窺］覗き見る。

［沙石爛］砂や石が焼け焦げる。右に引いた『説苑』参照。「沙石」の語は木華「海賦」（『文選』巻十二）に「乃巖坻之隈、沙石之鈌、毛翼産鷇、剖卵成禽。（乃ち巖坻の隈、沙石の鈌、毛翼　鷇を産み、卵を剖きて禽を成す。）」と見える。

3曀曀風逾静　4曈曈日漸旰

［曀曀］曇って暗い様。『詩経』邶風・終風に「曀曀其陰、虺虺其雷（曀曀として其れ陰り、虺虺として其れ雷す）」とあり、鮑照「学劉公幹体」詩五首其二に「曀曀寒野霧、蒼蒼陰山柏（曀曀たり　寒野の霧、蒼蒼たり　陰山の柏）」とある。

［逾静］ますますひっそりと穏やかになる。梁・王籍「入若邪溪」詩に「蟬噪林逾静、鳥鳴山更幽（蟬　噪ぎて　林　逾いよ静かに、鳥　鳴きて　山　更に幽なり）」とある。「風」と「静」の組み合わせは、何遜「春夕早泊和劉諮議落日望水」詩に「日暮江風静、中川聞棹謳（日暮　江風　静かに、中川　棹謳を聞く）」との用例がある。

［曈曈］日の光が弱く薄暗い様。「曈」は『説文解字』七篇上・日部に「曈、曈曨、日欲明也。（曈、曈曨、日の明らかならんと欲するなり。）」とあって、日が昇ったばかりの薄明るい様をいうが、ここは夕暮れの薄闇をいう。六朝詩ではあまり用例が見当たらないが、月が昇ったばかりの薄暗い様を表す「朧朧」であれば斉・虞炎「詠簾」詩に「朧朧引光輝、晻曖映容質（朧朧として光輝を引き、晻曖として容質を映す）」と見える。

［日漸旰］太陽がだんだんと沈んでいく。謝朓「詶王晋安」詩（『文選』巻二十六）に「払霧朝青閣、日旰坐彤闈（霧を払ひて青閣に朝し、日　旰るまで彤闈に坐す）」とあり、李善注は『春秋左氏伝』哀公十三年の「（趙鞅曰）『日旰矣』。（『日　旰けたり』と。）」とあり、『説文解字』七篇上・日部に「旰、晩也。」（「晩」、李善注作「日晩」。）とあるのを引く。

5習静閟衣巾　6読書煩几案

［習静］穏やかな生活に慣れ親しむ。梁・朱超「対雨」詩「当夏苦炎埃、習静対花台（夏に当たりて炎埃に苦しみ、静けさに習ひて花台に対す）」と見えるが、六朝詩には用例が少ない。

［閟］閉じ込める。梁・江淹「別賦」（『文選』巻十六）に「春宮閟此青苔色、秋帳含茲明月光。（春宮　此の青苔の色に閟ぢられ、秋帳　茲の明月の光を含む。）」と見える。李善注は『詩経』魯頌・閟宮に「閟宮有侐、実実枚枚（閟宮　侐なる有り、実実枚枚たり）」とあり、毛伝に「閟、閉也。」とあるのを引く。

［衣巾］衣と冠。梁・沈約「新安江水至清浅深見底貽京邑遊好」詩（『文選』巻二十七）に「紛吾隔囂滓、寧仮濯衣巾（紛として　吾　囂滓を隔つ、寧くんぞ衣巾を濯ぐに仮らんや）」とある。

［読書］六朝詩では宋・謝霊運に「斎中読書」（『文選』巻三十）と題する詩がある。

［煩］熱のために頭が痛くなる。『説文解字』九篇上・頁部に「煩、熱頭痛也。（煩、熱にて頭の痛むなり。）」

とある。

［几案］つくえ。梁・陸倕「石闕銘」（『文選』巻五十六）に「策定帷幄、謀成几案。（策は帷幄に定まり、謀は几案に成る。）」とある。また、梁簡文帝「苦熱行」に「寝興煩几案、俯仰倦幃牀（寝興　几案に煩はされ、俯仰　幃牀に倦む）」と同一語句がある。

7 臥思清露浥　8 坐待高星燦

［臥思］横になってもの思いに耽る。六朝詩には他の用例は見当たらない。

［清露］清らかな露。月光に照らされることが多い。張衡「西京賦」に「立脩茎之仙掌、承雲表之清露。（脩茎の仙掌を立て、雲表の清露を承く。）」とあり、陸機「赴洛道中作」詩二首（『文選』巻二十六）其二に「清露墜素輝、明月一何朗（清露　素輝を墜とし、明月　一に何ぞ朗らかなる）」とある。

［浥］潤う。『詩経』召南・行露に「厭浥行露、豈不夙夜（厭浥たる行露、豈に夙夜せざらんや）」とあり、毛伝に「厭浥、湿意也。（厭浥、湿ふの意なり。）」とある。また、謝霊運「入彭蠡湖口」詩（『文選』巻二十六）に「乗月聴哀狖、浥露馥芳蓀（月に乗じて哀狖を聴き、露に浥ひて芳蓀馥る）」と。

［坐待］為すところなく待つ。『三国志』魏書・公孫瓚伝評に「公孫瓚保京、坐待夷滅。（公孫瓚　京を保ち、坐して夷滅を待つ。）」とある。

［高星］天の高いところで光る星。梁簡文帝「阻帰賦」に「発伏鼈之雄気、耀策馬之高星。（伏鼈の雄気を発し、策馬の高星を耀かす。）」と見える。「策馬」は星の名。

［燦］明るい。曹植「贈徐幹」詩（『文選』巻二十四）に「円景光未満、衆星粲以繁（円景　光　未だ満たず、衆星　粲として以て繁し）」とある。「燦爛」「粲爛」は畳韻、明るい様。

9 蝙蝠戸中飛　10 蟣蠓窓間乱

［蝙蝠］コウモリ。双声。曹植「蝙蝠賦」に「吁何姦気、生茲蝙蝠。（吁　何の姦気ぞ、茲の蝙蝠を生ず。）」とあり、陸機「失題」詩に「曽不如老鼠、翻飛成蝙蝠（曽ち老鼠に如かず、翻り飛びて蝙蝠と成る）」とある。

［戸中］扉の内側。鮑照「翫月城西門解中」詩（『文選』巻三十）に「夜移衡漢落、徘徊帷戸中（夜　移りて衡漢　落ち、帷戸の中に徘徊す）」とある。

［蟣蠓］ヌカカ、マクナギ。双声。楊雄「甘泉賦」（『文選』巻七）に「歴倒景而絶飛梁兮、浮蟣蠓而撇天。（倒景を歴て飛梁を絶り、蟣蠓に浮かんで天を撇ふ。）」とあり、『爾雅』釈虫に「蠓、蟣蠓。」とあって郭璞注に「小虫似蚋、喜乱飛。（小虫　蚋に似て、喜びて乱飛す。）」という。

［窓間］窓と窓の間。部屋の中。六朝詩には他の用例は見当たらない。

11 実無河朔飲　12 空有臨淄汗

［実無］本当に～がない。沈約「洛陽道」に「洛陽大道中、佳麗実無比（洛陽　大道の中、佳麗　実に比ひ無し）」とある。

［河朔飲］夏、暑さを避けるための飲み物。『初学記』巻三が引く曹丕「典論」に「大駕都許、使光禄大夫劉松北鎮袁紹軍。与紹子弟日共宴飲。松嘗以盛夏三伏之際、昼夜酣飲極酔、至於無知、云以避一時之暑。二方化之。故南荊有三雅之爵、河朔有避暑之飲。（大駕　許に都し、光禄大夫劉松をして北のかた袁紹の軍を鎮めしむ。紹の子弟と日び宴飲を共にす。松　嘗て盛夏三伏の際を以て、昼夜に酣飲して酔ひを極め、知無きに至り、以て一時の暑を避くと云ふ。二方　之れに化せらる。故に南荊に三雅の爵有り、河朔に避暑の飲有り。）」と見える故事に拠る。「河朔」は黄河以北の地。北周・庾信「聘斉秋晩館中飲酒」詩に「欣茲河朔飲、対此洛陽才（茲の河朔の飲を欣び、此の洛陽の才に対す）」とある。

［臨淄汗］大都会で道を行き交う人々の汗が雨のように降り注ぐ。「臨淄」は東周期の斉の都、今の山東省淄博市。沈約「斉故安陸昭王碑文」（『文選』巻五十九）に「臨淄之揮汗成雨、曽何足称。（臨淄の汗を揮ひて雨を成すも、曽ち何ぞ称するに足らん。）」とあり、李善注は『戦国策』斉策一に「蘇秦為趙合従、説斉宣王曰『…。臨淄之途、車轂擊、人肩摩、連衽成帷、挙袂成幕、揮汗成雨』。（蘇秦　趙の為に合従し、斉の宣王に説きて曰く『…。臨淄の途は、車轂　擊ち、人肩　摩し、衽を連ねて帷を成し、袂を挙げて幕を成し、汗を揮ひて雨を成す』。）」とあるのを引く。

13 遺金不自拾　14 悪木寧無幹

［遺金不自拾］夏の暑い盛りに皮衣を着た貧乏な人間であっても道に落ちている金さえ拾わない。『論衡』書虚に「伝書言延陵季子出游、見路有遺金。当夏五月、有披裘而薪者。季子呼薪者曰、『取彼地金来』。薪者投鎌於地、瞋目払手而言曰、『何子居之高、視之下、儀貌之壮、語言之野也。吾当夏五月、披裘而薪、豈取金者哉』。（伝書に言ふ　延陵の季子　出游し、路に遺金有り、夏五月に当たり、裘を披て薪とする者有るを見る。季子　薪とする者を呼びて曰く、『彼の地の金を取り来たれ』と。薪とする者　鎌を地に投じ、目を瞋らし手を払ひて言ひて曰く、『何ぞ子の居ることの高くして、視ることの下く、儀貌の壮にして、語言の野なるや。吾　夏五月に当たり、裘を披て薪とす、豈に金を取る者ならんや』と。）」と見える故事に拠る。『史記』孔子世家に「与聞国政三月、粥羔豚者弗飾賈、男女行者別于塗、塗不拾遺。（国政に与り聞くこと三月、羔豚を粥ぐ者　賈を飾らず、男女の行く者　塗を別にし、塗に遺ちたるを拾はず。）」とあるなど、「塗不拾遺」は為政者の教化が行き届いていることをいう。『春秋公羊伝』桓公八年に「冬不裘、夏不葛。（冬も裘せず、夏も葛せ

ず。)」と見え、何休注に「裘葛者禦寒暑之美服。(裘葛は寒暑を禦ぐの美服なり。)」とある。

[悪木]「悪木」という名の役に立たない木。陸機「猛虎行」(『文選』巻二十八)に「渇不飲盗泉水、熱不息悪木陰。悪木豈無枝、志士多苦心(渇するも盗泉の水を飲まず、熱するも悪木の陰に息はず。悪木　豈に枝無からんや、志士　苦心多し)」とあり、李善注は南朝宋・江邃『文釈』に「『管子』曰、『夫士懐耿介之心、不蔭悪木之枝。悪木尚能恥之、況与悪人同処』。(『管子』に曰く、『夫れ士は耿介の心を懐き、悪木の枝に蔭せず。悪木すら尚ほ能く之れを恥づ、況んや悪人と同に処るをや』と。)」とあるのを引く。

15 願以三伏晨　16 催促九秋換

[三伏]一年で最も暑い頃。夏至の後、三番目の庚の日を初伏、四番目の庚の日を中伏、立秋後の最初の庚の日を末伏といい、合わせて三伏という。晋・程暁「嘲熱客」詩に「平生三伏時、道路無行車(平生　三伏の時、道路に行車無し)」とあり、北斉・蕭慤「奉和初秋西園応教」詩に「池亭三伏後、林館九秋前(池亭　三伏の後、林館　九秋の前)」と見える。

[催促]せきたてる。双声。楽府「蒿里」古辞に「鬼伯一何相催促、人命不得少踟躕(鬼伯　一に何ぞ相ひ催促する、人命　少くも踟躕するを得ず)」とある。

[九秋]秋、秋の九十日。謝霊運「登石門最高頂」詩(『文選』巻二十二)に「心契九秋幹、目翫三春黄(心は九秋の幹に契り、目は三春の黄を翫ぶ)」とある。何遜には「夜夢故人」詩に「九秋時未晩、千里路難窮(九秋時　未だ晩からず、千里　路　窮め難し)」との用例がある。

[換]巡って入れ代わる。鮑照「擬行路難」十八首其八(『玉台』巻九作「行路難」)「初送我君出戸時、何言淹留節迴換(初め我を送りて　君　戸を出でし時、何ぞ言はん　淹留して　節　迴換せんと)」とある。

「擬青青河畔草転韻体為人作其人識節工歌(青青河畔草に擬す。転韻体もて人の為に作る。其の人　節を識りて歌を工にす)」

【本文及び書き下し】

1 春蘭日応好　春蘭　日に応に好かるべく
2 折花望遠道　花を折りて遠道を望む
3 秋夜苦復長　秋夜　復た苦だ長く
4 抱枕向空牀　枕を抱きて空牀に向かふ
5 吹台下促節　吹台　促節を下すも
6 不言於此別　言はず　此に於いて別れんとは
7 歌筵掩団扇　歌筵　団扇に掩はる
8 何時一相見　何れの時にか　一たび相ひ見ん
9 絃絶猶依軫　絃　絶ゆるも　猶ほ軫に依り
10 葉落纔下枝　葉　落つるも　纔かに枝より下るのみ
11 即此雖云別　此れに即けば云に別ると雖も
12 方我未成離　我に方ぶれば未だ離るるを成さず

【日本語訳】

1 春の蘭は日ごとに香しさを増していくので
2 お贈りしたいと花を手折ってあなたがいらっしゃるはずの遠くまで続く道を眺めています
3 秋の夜は今年もまた長々しく続くのが苦しくて
4 枕を胸にかき抱いて空っぽのベッドと向かい合っています
5 この高殿でテンポの速い悲しい曲を演奏しております
6 ここでお別れだとは仰有いませんでしたのに
7 思えば倡家の女だった時も扇で顔を隠して歌っておりましたし
8 いったい何時になれば見つめ合うことができるのでしょう
9 絃は切れても琴柱からなお離れませんし
10 葉は散っても枝のすぐ下に落ちるだけのことです
11 絃や葉の立場から言えば確かに「別れた」ことになるのでしょうが
12 このわたしに比べれば、「離れた」ことにはとてもなりません

【校勘】

○『玉台新詠』巻五。『文苑英華』巻二百八。『楽府詩集』巻三十八。『古詩紀』巻九十三。

0 「擬青青河畔草転韻体為人作其人識節工歌」、『玉台』作「学青青河畔草」。『英華』『楽府』並作「青青河畔草」。

1 「蘭」、『玉台』作「園」。『校注』注・『詩紀』注並云「一作『園』」。「日」、『英華』『楽府』皆作「已」。「応」、『楽府』作「有」。

5 「台」、『玉台』作「楼」。『詩紀』注云「一作『楼』」。

9 「絶」、『楽府』注云「一作『断』」。

10 「纔」、『玉台』『英華』『楽府』皆作「裁」。

【押韻】

「好」「道」、上声三十二皓韻。「長」「牀」、下平十陽韻。「節」、入声十六屑韻。「別」、入声十七薛韻。節・薛同用。「扇」、去声三十三線韻。「見」、去声三十二霰韻。見・線同用。「枝」「離」、上平五支韻。

【題解】この詩は『玉台新詠』巻五・『文苑英華』巻二百八・『楽府詩集』巻三十八に見える。『玉台』は題を「学青青河畔草」に作り、『英華』『楽府』はいずれも「青青河畔草」と題する。『四庫全書総目』巻百四十八「集部・別集類一」に「此本標題作『擬青青河畔草転韻体為人作其人識節工歌』、与『玉台新詠』不同。考六朝以前之詩題、無此体格、顕為後人所妄加。又『青青河辺草』為蔡邕之作、『青青河畔草』為枚乗之作、六朝人所擬、截然有別。此效邕体而題作『畔』字、明為後人拠

『十九首』而改、復以『古詩』不換韻、此詩換韻、妄増『転韻体』云云、蓋字句亦多所竄乱、非其旧矣。（此の本　標題を『擬青青河畔草転韻体為人作其人識節工歌』に作り、『玉台新詠』と同じからず。考ふるに六朝以前の詩題、此の体格無く、顕らかに後人の妄りに加ふる所と為る。又た『青青河辺草』は蔡邕の作為り、『青青河畔草』は枚乗の作為り、六朝人の擬する所、截然として別有り。此れ邕体に效ひて題して『畔』字に作るは、明らかに後人に『十九首』に拠りて改められ、復た『古詩』　換韻せざるに、此の詩の換韻するを以て、妄りに『転韻体』云云を増す、蓋し字句も亦た竄乱する所多く、其の旧に非ざらん。）」とある。

【語釈】

０**擬青青河畔草転韻体為人作其人識節工歌**

［青青河畔草］下に引いた通り、『玉台』巻一は枚乗「雑詩」九首其五として採録する。同じ詩が『文選』巻二十九では「古詩十九首」其二として載せている。一方、蔡邕「青青河辺草」も『玉台』巻一に「飲馬長城窟行」として収めるが、『文選』巻二十七はその古辞とする。二篇を李善注本『文選』から引いておく。

「古詩十九首」其二（枚乗「青青河畔草」）

青青河畔草　青青たり　河畔の草
鬱鬱園中柳　鬱鬱たり　園中の柳
盈盈楼上女　盈盈たり　楼上の女
皎皎当窓牖　皎皎として窓牖に当たる
娥娥紅粉粧　娥娥たり　紅粉の粧ひ
纖纖出素手　纖纖として素手を出だす
昔為倡家女　昔　倡家の女為り
今為蕩子婦　今　蕩子の婦為り
蕩子行不帰　蕩子　行きて帰らず
空牀難独守　空牀　独り守り難し

「飲馬長城窟行」古辞（蔡邕「青青河辺草」）

青青河辺草　青青たり　河辺の草
綿綿思遠道　綿綿として遠道を思ふ
遠道不可思　遠道　思ふべからざるも
夙昔夢見之　夙昔　夢に之れを見る
夢見在我傍　夢に見れば我が傍らに在り
忽覚在佗郷　忽として覚むれば佗郷に在り
佗郷各異県　佗郷　各おの県を異にし
輾転不可見　輾転して見るべからず
枯桑知天風　枯桑は天風を知り
海水知天寒　海水は天寒を知る
入門各自媚　門に入りて各自おの媚ぶ
誰肯相為言　誰か肯て相ひ為に言はんや
客従遠方来　客　遠方より来たり
遺我双鯉魚　我に双鯉魚を遺る
呼児烹鯉魚　児を呼びて鯉魚を烹れば

中有尺素書　中に尺素の書有り
長跪読素書　長跪して読素書を読む
書上竟何如　書上　竟に何如
上有加餐食　上には餐食を加へよと有り
下有長相憶　下には長く相ひ憶ふと有り

【題解】が引く『四庫全書総目』が指摘する通り、何遜の作は詩題には「河畔」に擬すとあり、内容も「河畔」を踏襲するが、押韻状況は「河辺」に近い。

［転韻］韻が換わる。『南斉書』楽志に「又尋漢世歌篇、多少無定、皆称事立文、並多八句、然後転韻。（又た漢世の歌篇を尋ぬるに、多少に定め無く、皆な事を称して文を立て、並びに八句より多ければ、然る後に韻を転ず。）」と見える。詩では何遜の例よりも早いものは見当たらない。

［識節］リズムを聴き分けられる。音楽の才能があることをいう。語は謝霊運「撰征賦」に「譬観曲而識節、似綴組以成章。（譬へば曲を観て節を識り、組を綴りて以て章を成すに似る。）」と見える。これも六朝詩には他の用例は見当たらない。

［工歌］上手に歌う。六朝詩にはあまり用例は見当たらないが、梁簡文帝「東飛伯労歌」二首其一に「可憐年幾十三四、工歌巧舞入人意（憐れむべし　年　幾（ほとん）ど十三四、歌を工にし巧みに舞ひて人の意に入る）」と見える。

1春蘭日応好　2折花望遠道

［春蘭］春の蘭。香りのよい植物とされる。嵇康「琴賦」（『文選』巻十八）に「若乃春蘭被其東、沙棠　其の西に殖（お）ふるが若し。）」とあり、李善注は『楚辞』九歌・礼魂に「春蘭兮秋菊、長無絶兮終古（春には蘭　秋には菊、長へに絶ゆること無く終古ならん）」とあるのを引く。沈約「悼亡」詩（『玉台』巻五）に「今春蘭蕙草、来春復吐芳（今春　蘭蕙の草、来春　復た芳を吐く）」とあるように毎年春になるとよい香りを漂わせる。

［折花］花を手折って贈り物にする。「古詩十九首」其六に「涉江采芙蓉、蘭沢多芳草。采之欲遺誰、所思在遠道（江を涉りて芙蓉を采る、蘭沢　芳草多し。之れを采りて誰にか遺（おく）らんと欲する、思ふ所は遠道に在り）」とあり、李善注は『楚辞』九歌・山鬼に「被石蘭兮帯杜衡、折芳馨兮遺所思（石蘭を被（き）て杜衡を帯とし、芳馨を折りて思ふ所に遺らん）」とあるのを引く。梁・劉孝威「擬古応教」詩（『玉台』巻九）に「誰家妖冶折花枝、蛾眉曼睇使情移（誰が家の妖冶か花枝を折り、蛾眉　曼睇（まんてい）　情をして移らしむ）」と。

［遠道］遠い旅先。遠くにいるあの人。右にも引いた「飲馬長城窟行」古辞に「青青河辺草、綿綿思遠道（青青たり　河辺の草、綿綿として遠道を思ふ）」とあり、李善注は「言良人行役、以春為期、期至不来、所以増思。

（良人　行役し、春を以て期と為し、期　至るも来たらず、所以に増ます思ふを言ふ。）」とする。二句、芳草である春蘭を手折り、遠くにいるあの人に贈りたいと願う女性を描く。二句、「蕩子の婦」となってからの春を描く。

3秋夜苦復長　4抱枕向空牀

［秋夜］秋の長々しく寂しい夜。魏文帝「雑詩」二首（『文選』巻二十九）其一に「漫漫秋夜長、烈烈北風涼（漫漫として　秋夜　長く、烈烈として　北風　涼し）」とあり、謝朓「秋夜」詩（『玉台』巻四）に「秋夜促織鳴、南隣擣衣急（秋夜　促織　鳴き、南隣　衣を擣つこと急なり）」

［苦復長］あまりにも長い。陸機「短歌行」（『文選』巻二十八）に「来日苦短、去日苦長（来たる日は苦だ短く、去りし日は苦だ長し）」とある。

［抱枕］独り寝の枕を抱きかかえる。六朝詩には他の用例は見当たらない。張華「情詩」五首其三（『文選』巻二十九。『玉台』巻二）に「拊枕独嘯歎、感慨心内傷（枕を拊して独り嘯歎し、感慨して　心　内に傷む）」（「拊」、『玉台』作「撫」。「嘯」作「吟」。「感慨」作「綿綿」。）とある。

［空牀］他に誰もいない寝台。右に引いた「古詩十九首」其二に「蕩子行不帰、空牀難独守（蕩子　行きて帰らず、空牀　独り守り難し）」とあった。何遜には「増新曲相対聯句」に「已切空牀怨、復看花柳枝（已に空牀の怨みに切に、復た花柳の枝を看る）」との用例がある。二句、「蕩子の婦」となってからの秋を描く。

5吹台下促節　6不言於此別

［吹台］河南省開封市の東南にあった台の名。ここは「盈盈楼上女（盈盈たり　楼上の女）」の楼、「蕩子の婦」の住居をいう。女性が「識節工歌」という設定なので「吹台」の名を用いた。『太平寰宇記』河南道一・東京上・開封府・開封県に「吹台、在県南五里。『陳留風俗伝』、『県有蒼頡師曠城、其城有列仙吹台。梁孝王亦増築焉』。（吹台、県の南五里に在り。『陳留風俗伝』に、『県に蒼頡師曠城有り、其の城に列仙吹台有り。梁の孝王も亦た焉れを増築す』と。）」とある。師曠は春秋時代、晋の平王に仕えた楽師。阮籍「詠懐」詩八十二首其三十一に「駕言発魏都、南向望吹台（駕して言に魏都を発し、南向して吹台を望む）」と見える。

［促節］速いリズム。悲しみを帯びた楽曲。陸機「擬東城一何高」（『文選』巻三十）に「長歌赴促節、哀響逐高徽（長歌は促節に赴き、哀響は高徽を逐ふ）」とある。

［不言］～とは仰有らなかった。沈約「擬青青河畔草」（「畔」『玉台』巻五作「辺」。）に「歎息想容儀、不言長別離（歎息して容儀を想へば、言はず　長く別離せんと）」（「言」、『玉台』作「欲」。）とある。

［於此別］ここで別れ別れになる。李陵「与蘇武」詩三首（『文選』巻二十九）其一に「長当従此別、且復立斯須（長く当に此れより別るべし、且く復た立ちて斯須せよ）」とある。何遜には「与沈助教同宿湓口夜別」詩に「行人従此別、去去不淹留（行人　此れより別るれば、去り去りて淹留せざらん）」、「詠白鷗兼嘲別者」詩（『玉台』巻五作「詠白鷗嘲別者」。）に「東西従此別、影響絶無由（東西　此れより別るれば、影響　絶えて由無し）」（「別」、『玉台』作「去」。）との用例がある。

7歌筵掩団扇　8何時一相見

［歌筵］歌姫が侍る宴席。何遜以前の用例は見当たらない。陳・徐陵「走筆戯書応令」詩（『玉台』巻八）に「舞席秋来巻、歌筵無数塵（舞席　秋来　巻き、歌筵　無数の塵）」と「舞席」との対で用いられる。

［掩団扇］扇で顔を隠して歌う。「擬軽薄篇」第15句「倡女掩扇歌」【語釈】参照。

［一相見］もう一度見つめ合う。蘇武「詩」四首其三に「行役在戦場、相見未有期（行役して戦場に在り、相ひ見ること　未だ期有らず）」と。二句、「倡家の女」だった頃の思い出を描く。

9絃絶猶依軫　10葉落纔下枝

［絃絶］琴の弦が切れる。謝霊運「入彭蠡湖口」詩（『文選』巻二十六）に「徒作千里曲、絃絶念彌敦（徒らに千里の曲を作せば、絃　絶えて　念ひ彌いよ敦し）」とあり、李善注は陸機「演連珠」五十首（『文選』巻五十五）其十四に「繁会之音、生於絶絃。（繁会の音、絶絃より生ず。）」とあるのを引く。また、鮑照「紹古辞」七首其三に「訪言山海路、千里歌別鶴。絃絶空咨嗟、形音誰賞録（訪ふは言に山海の路、千里　別鶴を歌ふ。絃　絶えて　空しく咨嗟し、形音　誰か賞録せん）」とある。

［依軫］琴柱に引っ掛かったまま。六朝詩には他の用例は見当たらない。「軫」は弦楽器の胴に立てて弦を支える小さな柱。『列女伝』弁通・阿谷処女に「嚮者聞子之言、穆如清風、不払不寤、私復我心。有琴無軫、願借子調其音。（嚮者に子の言を聞くに、穆として清風の如く、払らず寤はず、私かに我が心を復せり。琴有るも軫無く、願子に借りて其の音を調へん。）」と見える。

［葉落纔下枝］落葉は枝のすぐ下に散る。梁武帝蕭衍「古意」詩二首（『玉台』巻七）其一に「不見松上蘿、葉落根不移（見ずや　松上の蘿、葉は落つるも根は移らず）」とある。

11即此雖云別　12方我未成離

［即此］これらを拠り所にすれば。「此」は前の「絃」「葉」を指す。謝朓「敬亭山」詩（『文選』巻二十七）に「要欲追奇趣、即此陵丹梯（要ず奇趣を追ひ、此に即きて丹梯に陵らんと欲す）」と見える。

［云別］別れる。陶淵明「答龐參軍」詩六章其五に「昔我云別、倉庚載鳴（昔　我　云に別れしとき、倉庚載ち鳴く）」と。

［方］比べる。対比する。ここは鈴木虎雄『玉台新詠（中）』（一九五五　岩波書店）の解釈が妥当だと思う。

［成離］離れ離れになる。梁元帝「春別応令」詩四首（『玉台』巻九）其二に「不聞離人当重合、惟悲合罷会成離（聞かず　離人の当に重ねて合すべきを、惟だ悲しむ合し罷めば会ず成離るるを成すを）」とある。四句、「絃絶」と言い「葉落」と言うけれども、それは「別」であって「離」ではないことを詠う。